

## 東西説話文学の接点

——「二羽の鳩」のモチーフについての考察——

谷 口 勇

人類の説話文学の原郷がインドにあることは古来から数かずの学者によって主張されてきたことであり、わけてもA・ロワズルール＝デロンシャン<sup>1)</sup>とT・ベンファイ<sup>2)</sup>の研究は大きな波紋を残している。『パンチャ・タントラ』<sup>3)</sup>、『ヒトパデーシャ』<sup>4)</sup>、『カター・サリット・サーガラ』<sup>5)</sup>をはじめ、『シュカ・サブタティ』<sup>6)</sup>までもがすでに邦訳されている事実は、我国でもインド説話文学への関心が深いことを証明している。

他方、インド起源と考えられる西洋の説話文学としては、『ローマ七賢物語』<sup>7)</sup>や『シンディバード物語』<sup>8)</sup>も試訳がなされてきた。もちろん、東西の仲介を果たしたアラブの説話文学にあっても、『千夜一夜物語』<sup>9)</sup>や『カリーラとディムナ』<sup>10)</sup>はすでに原典からの邦訳が行なわれているほどだ。もっとも、当然邦訳されるべき作品で未訳のままになっているものも数多いが、これらは今後の発掘が待たれるところである。

『ローマ七賢物語』が『シンディバード物語』と兄弟関係にあり、前者が西洋系、後者が東方系として、それぞれの由来が明白になっていることは、筆者が別の機会に詳述したことがある。<sup>11)</sup> しかしながら、これらの物語と、東洋の同類の説話文学とはどういう関係があるのかという点については、金子健二氏も「今日なほ學界に残された一つの大きな謎である。是等は私達東洋人の當然解決すべき問題ではなからうか」<sup>12)</sup>と提起をされていたように、未解決の課題になっていたのである。本稿はこの課題に対する一つの有力な解答を出そうとする試みである。

この謎を解く鍵は、S・トンプンのモチーフ・ナンバーで言えば、N346 (Pigeon hastily kills his mate for stealing wheat)<sup>13)</sup>にあることを最近になって筆者は発見した。ここで問題にするのは、具体的には、ユダヤ系『シンディバード物語』と『百喻経』との接点である。以下、それぞれの『物語』に出ている上掲モチーフの話を対比してみよう。

A) 二鴿喩

昔有雄雌二鴿共同一巢。

秋果熟時。取果滿巢。

於其後時。果乾減少。

唯半巢在。雄瞋雌言。

取果勤苦。汝獨食之。

唯有半在。雌鴿答言。

我不獨食。果自減少。

雄鴿不信。瞋恚而言。

非汝獨食。何由減少。

即便以疇啄雌鴿殺。

未經幾日。天降大雨。

果得濕潤。還復如故。

雄鴿見己。方生悔恨。

彼實不食。我妄殺他。

即悲鳴命喚雌鴿汝何處去。

凡夫之人亦復如是。

顛倒在懷。妄取欲樂。

不觀無常。犯於重禁。

悔之於後。竟何所及。

後唯悲歎。如彼愚鴿。

(『百喻経』, 下卷)<sup>14)</sup>

B)

"זוג אחד מן החורים יצאו ממקום

אחד בימי הקיץ ואגרו חיסים לרוב

וימלאו ארובה אח[ת] פה לפה.

וצוה הזכר לנקבה שלא ליגע

בהן עד ימי החורף - 'בעת שלא

נמצאו בחוץ, ואז נאכלנו.

"ויהי בחום הקיץ, יבשו החסים בארובה

וחסרה. ויבא הזכר בארובה והנה

חסרה. ויאמר הזכר אל הנקבה:

"'הלא צויתוך לבלתי נגוע בחסים.

"ותאמר לו: 'חי נפסי, אדוני, לא נגעתי בהן.

ולא שמע אליה, ויחל להכות[ה] בכנפיו

ולדקרה בפיו עד שמתה. ויהי בעת

החורף, ירדו הגשמים ונתמלא[ת] הארובה

ונפתחו החסים<sup>1</sup> ויבא הזכר אל

הארובה ומצאה כבראשונה. אז ידע

כי בחנם המית זוגתו. ויחעצב

בלבו וישאר יחידי.

(Tales of Sendebār, ll. 347—364)<sup>15)</sup>

次にそれぞれの話の新訳を示そう（日本語・英語）。

C) 鳩の<sup>はなし</sup>喩

むかし、雌雄一対の鳩がいて、一つの巣に住んでいた。秋になって果実が熟すると、果実をとって来て、巣にあふれるばかりになっていたが、そのうち果実が乾燥して分量は減り、巣の半分ばかりになってしまった。雄鳩は腹を立てて雌に言った。

「果実を取って来るのに、どんな苦勞をしたか。それをお前はこっそり食べてしまったのだな。あと半分しか残っておらぬ」

雌鳩は、

「わたしがこっそり食べたのではないわ。自然に減ったのよ」

と答えたが、雄鳩はそれを信じないで、怒って、

「お前が食べたのでなければ、どういうわけで減ったのだ」

と言って、<sup>くちばし</sup>嘴でつついて雌鳩を殺してしまった。幾日もたたぬうちに大雨が降り、果実は水を含んで、またもとの大きさになった。これを見て雄鳩は悔恨の情に襲われた。

D) ... “A certain pair of doves went out in the summer and gathered much wheat and filled a nest to the brim.

And the male commanded the female not to touch the wheat until winter came - ‘When we will find none outdoors, then will we eat it.’

“And it came to pass in the summer’s heat the wheat grew parched in the nest and there appeared to be some missing.

And the male came to the nest, and lo, some was lacking. Then said the male to the female:

“ ‘Did I not command you not to touch the wheat?’

“And she said to him, ‘By my life, my lord, I did *not* touch it.’

“And he did not listen to her, but began to beat her with his wings and to peck at her with his beak until she was dead.

“And when winter came, the

「あれが食べなかったのは本当だったのだ。それを理由もなく殺してしまったんだ」

と悲しげに雌鳩に向かって鳴き、「お前はどこへ行ってしまったのだ」と叫んだ。

凡夫もまたこれと同じである。顛倒した考えをもって、みだりに欲楽にふけり、無常の理を見きわめずに、重禁を犯すのである。それを後になって悔むのだが、もはや手遅れ、ただ悲嘆に暮れるばかりである。ちょうどあの愚かな鳩のように。

(古田和弘訳)<sup>16)</sup>

rains descended and the wheat expanded and the nest became full. And the male dove came to the nest and he found all as it had been before.

“Then he knew that he had slain his mate without cause. And in his heart he was sorrowful and he remained all alone.\*

\* *Vat.* [= Vatican 写本100.3]

continues the tale: the male dove is so saddened that he dies too (fol. 166r).

(Trans. by M. Epstein)<sup>17)</sup>

二つの話がびたり符合するものであることは今更付言するまでもなからう。これまで、この事実に誰も気付かなかったのはむしろ不思議な位である。もちろん、東洋学者は当然のことながら、西洋の説話に対する関心が薄かったであろうし、逆に西洋学者は東洋のことにまで手を延ばせなかったという事情もあろう。『百喻経』がかつて西洋の言語に訳されたことはなかったのであり、やっごく最近になって、H・C・グリエーヴィッチによるロシア語訳<sup>18)</sup>が実現したばかりという有様なのだ。しかし、東洋の、とりわけ日本の学者は、当然もっと早く気付くべきだったろう。というのは、『千夜一夜物語』第597夜（「女たちのずるさとたくらみの物語（または七人の大臣たちの物語）」の中の一つ）に、「雄雌二羽のハトの話」が出ているからだ。<sup>19)</sup>

『千夜一夜物語』中のこの話では、*Sendebär*とは違って、奴隷女が「男どもの悪だくみ」について語るというふうになっており、しかも付図Iに示したように、この物語は東方系の『シンディバード物語』でも最も新しい（14世紀）

のだが、その内容では次に示すとおり、『百喻経』と殆んど変わらない。

E) 雄雌二羽のハトの話

雄雌つがいの二羽のハトが、冬の季節には巢に大麦と小麦を集め貯えたのですが、夏になりますと、穀物がだんだん減り、不足してきました。雄バトは雌バトにむかって、

「お前があの穀物を食べたのだろ」

と言いました。雌バトは、

「とんでもないわ、神さまに誓って、私はひと粒も食べていませんわ」

と答えました。しかし雄バトは雌バトの言うことを信用せず、翼で叩き、口ばしでつついて、とうとう殺してしまいました。やがて寒い季節になり、穀物が元どおりに増えました。そこで雄バトは、妻である雌バトに敵意をいだいて、不当な殺し方をしたことを悟り、悔やみましたが、もはやあとの祭りでした。そして雌バトのそばに、泣き、嘆き、悲しんで眠り、飲食を断ちました。その結果雄バトはだんだん衰弱し、やがて死んだのです。

(池田修訳)<sup>20)</sup>

E) 二羽の鳩

昔、ひとつがいの鳩が冬のあいだに、自分の巢の中に小麦や大麦をどっさりたくわえました。夏になると、食料は減って、だんだん乏しくな<sup>おぼと</sup>ってまいりました。雄鳩が妻にむかって、「おまえがこれを食べたんだな」と言うと、妻は「いえ、とんでもない、さわったこともないわ!」と答えました。けれども、夫は妻の言<sup>ことば</sup>言葉を信じませんでした。翼でたたくやら、くちばしでつつくようにして、とうとう殺してしまいました。

寒い冬がくると、穀類はまたふえて、もとどおりになりましたので、雄鳩は無実の罪で妻を殺したことを悟り、悔いてもせんない後悔をいたしました。雄鳩はそこで亡<sup>な</sup>き妻のそばに身を投げ出して、悲嘆にあけくらし、飲み食いもやめて、しまいには病いにかかって、あえなく最期をとげました。

(大場正史訳)<sup>20)</sup>

面白いのは8世紀半ばのイブヌ＝ル＝ムカッフアイ作『カリーラとディムナの書』にもすでに同一モチーフの話が出現しているという事実だ。この作品の源流は、主として『パンチャ・タントラ』であり、その他に、『マハーバーラタ』からも教章が流入しているのだが、今われわれが問題にしようとしているモチーフは、これらのインド起源の説話にはないものなのである。

#### F) 二羽の鳩<sup>はと</sup>

「雌雄の鳩<sup>はと</sup>が、小麦と大麦をいっぱい詰めた。そして雄鳩が、『曠野<sup>こうや</sup>でなにか見付かる間は、巢に貯えたものを決して食べないことにしよう。冬が来て草原になにもなくなったら、ここに来て食べるのだ』と雌鳩に言いました。

雌鳩は、

『それはいい考えね』

と喜んで同意しました。彼らが詰めたときには穀物が湿っていたので、じきに巢がいっぱいになりました。しかし雄鳥が旅に出かけてから夏が来て、穀物は乾き、量が減りました。帰ってきた雄鳥はそれを見、

『この中の物は一粒も食べないことに決めたじゃないか。それなのにどうして食べた？』

と雌鳥を責めました。彼女は一粒も食べなかったと誓って断言しましたが、信用しません。そして嘴で雌鳩を突つき、たたき殺してしまいました。やがて冬が来て雨が降り出すと、穀物は湿り、もとのように量が殖えて、巢を満たしました。それを知った雄鳩は後悔し、亡骸<sup>なきがら</sup>の傍らに寝て、雌鳩を呼びました。

『ああ、いくら呼んでももうお前に会えないとしたら、生きていていたいなんになるだろう？』

良識のある人は、決して懲罰や刑を急いではならない、とくにこの雌鳩の場合のように、後悔の憂いのあるときはなおさらだということを知らなければなりません」

(菊池淑子訳)<sup>21)</sup>

F) の第二段落の“むすび”はE)には現われていないとはいえ、この両者の類縁性は明らかであって、中世スペイン語版 *Sendebār* の現代語訳を行なったJ・フラデーハス・レブレーロや、R・バートンもその事実を特記している。<sup>22)</sup> ちなみに、中世スペイン語版 *Sendebār* では次のようになっている。

G) «Señor, era vn palomo e vna paloma, e morauan en vn monte e auian y su nido. E en el tienpo del agosto, cogieron su trigo e guardaronle en su nido. E fuese el palomo en su mandado; e dixo a la paloma que non comiese del trigo grano mientras que durase el verano: — Mas — dixole — vete a esos canpos e come d'eso que fallares; e quando viniere el yuierno, comerás del trigo, e folgarás.

E despues vinieron las grandes calores, e secaronse los granos, e encogieronse e pegaronse. E quando vino el palomo, dixo: — ¿Non te dixes que non comieses grano? ¿que lo guardases para el yuierno?—E ella jurole que non comiera grano, nin lo començara poco nin mucho. E el palomo non lo quiso creer; e començola de picar e de ferirla de los onbros e de las alas, atanto que la mato. E paro mientes el palomo al trigo, e vio que creçia con el rrelente, e que non auia menos nin mas: e el fallose mal porque mato a la paloma.

E, seño~r, he miedo que te fallaras ende mal, asi commo se fallo este palomo, si matas tu fijo, qu~el engaño de las mugeres es la mayor cosa del mundo».

(Edizione critica di E. Vuolo)<sup>23)</sup>

『カリーラとディムナの書』がアラブ語からスペイン語に訳された<sup>24)</sup> のとほとんど時を同じくして、この *Sendebār* も1253年に「アラブ語からカスティリア語に」訳されたことが“プロローグ”に書かれているところから、上掲引用

個所は『カリーラ』からの借用ではないかとの推測も可能だろう。ところが、奇妙なことに、問題のスペイン語訳 *El Libro de Calila e Digna* には “*La paloma y su nido*” の話は入っていないのである。訳者はどういう意図からこのような移動を行なったのだろうか？ あるいはひょっとして、それを *Sendebār* に収めた以上、スペイン語版 *Calila* の中で重複することを避けたのかも知れない。とにかく、スペイン語版 *Sendebār* には、西洋系の『ローマ七賢物語』にはない、問題のモチーフが収まることとなったのである。

このモチーフが最も整然とした形で現われるのは、(西洋で『ピルパイの寓話』として周ねく知れ渡った作品を) フサイン・ヴァーイズが15世紀初頭にペルシャ語に訳した *Anvār-i Suhayli* (『カノープスの輝き』) においてである。幸い英訳がなされているので、次に引用しておこう。

#### H) *The Two Pigeons*

They have related that a pair of pigeons had collected some grains of corn in the beginning of summer, and stored them up in a retired place as a hoard for winter. Now that corn was moist, and when summer drew to a close, the heat of the atmosphere had such an effect upon the corn, that it dried up, and appeared less than it did at first. During these days the male pigeon was absent from home. When he came back and observed that the corn appeared to be less in quantity, he began to reproach his partner, and said: “We had laid up this grain for our food in winter, so that when the cold became excessive, and from the quantity of snow, no corn was to be found on the fields, we might support ourselves with this. At this time, when pickings are to be met with in mountain and plain, why hast thou eaten our supplies? and why hast thou swerved from the path of prudence? Hast thou not heard, pray, that the sages have said:

Now that thou hast food in plenty,



Do thy best it up to store,  
That thou may'st still have abundance  
When the harvest-time is o'er."

The female pigeon said: "I have eaten none of this grain, nor have I used any of it in any way whatever." As the male pigeon saw that the grain had decreased, he did not believe her denial, and pecked her till she died. Afterwards, in the winter, when the rain fell incessantly, and the marks of dampness were evident on door and wall, the grain imbibed moisture and returned to its former state. The male pigeon then discovered what had been the cause of the apparent loss, and began to lament and to bewail his separation from his affectionate partner. Thus he wept bitterly, and said: "Grievous is this absence of my friend, and more grievous still that repentance is unavailing.

With prudence act, for haste will cause thee pain  
And loss, and to regret the lost is vain."

And the moral of this story is, that it behoves a wise man not to be precipitate in inflicting punishment, lest, like the pigeon, he suffer from the anguish of separation.

(Trans. by W. A. Clouston)<sup>25)</sup>

ところで、『千夜一夜物語』とほぼ同時代（付図 I 参照）に属するペルシャ語版『シンディバード物語』（*Sindibād Nāma*）では、問題のモチーフは「二羽のヤマウズラの話」として出ており、しかも話は相当に引き延ばされて、複雑な内容になっている。同じ英訳から次に引用しておこう。

#### I) *Story of the Two Partridges*

Once upon a time two partridges dwelt together in the closest intimacy — like two souls in one body, or like two bodies in one shirt; and between

them was neither duality nor separation. In their vicinity lived a hawk, that from morning to night preyed on young partridges, and that occasioned the male bird constant apprehension, for he was a troublesome and meddlesome neighbour. When you buy a house anywhere, first take care to examine well its neighbourhoods. This hawk was ever on the watch, and never allowed a young bird to escape, while the parents were in continual terror, and scarcely ventured to thrust their heads out of the nest. One night the male partridge proposed to his wedded partner that they should leave their home, saying: "I will go to the confines of Ray to escape the oppression of this bird of evil omen. There will I provide a home, and collect corn and grain. I have there two relations, who are my friends. Do thou, too, follow me thither, for this is no home, but a prison — a net." His mate shed tears, while he continued: "Follow after me to those friends; for no one would, for the sake of his own case, expose his family to destruction."

While they were thus conversing, the hoopoe paid them an unexpected visit. "What has happened," inquired he; "and why is the good-wife weeping?" They detailed to him their circumstances, the annoyance occasioned by their neighbour, and their resolution of removing. The hoopoe observed: "In Ray there prevails a pestilence; it is the abode of plague, of misery, and woe. I have visited the most distant confines of the earth, and have seen something of every country you can mention. Do not imagine that there is in the whole earth a spot of security and peace like Shīrāz — whose very rubbish and thorns are pleasanter than roses; whose every pebble is a ruby, and whose dust is gold! Musalla,<sup>1</sup> with the stream of Ruknābād flowing through it, is a paradise, with Kauthar<sup>2</sup> in the midst. Sweet, too, is the air of its Ja'farābād,<sup>3</sup> whose breezes perform the work of the Messiah.<sup>4</sup> In the environs of that amber-scented city<sup>5</sup> there is

a pleasure-ground like Paradise, in which is a delightful fountain, resembling the Fountain of Life. There partridges are abundant, hence it is called the Fountain of Partridges. Beyond it is another fountain, which you might suppose to be that of Kauthar. In that quarter a single ear of corn yields two stacks. A cousin of mine is the shaykh of the district. Still further on is the City of the Peacock, where you might stop a few days."

When the partridge heard this, he smiled, and said to the hoopoe: "O bird, full of understanding! in this desert of grief you are the Khizar<sup>6</sup> of my path; well have you spoken, and you are indeed my friend!" Then embracing him closely, he bade him adieu, and set out on his journey, accompanied by his spouse. The delighted partridge ceased not smiling with joy at his escape from his bad neighbour. He ate not — drank not — but travelled on from morn to night — from even till morn. Thus he proceeded till he reached the place of security, and beheld from the top of a mountain the Stream of Birds. Then did his mate exclaim to him: "Gratitude and praise! thanks without bound or limit! It is indeed a blessed abode — a charming spot! In this delightful retreat they fixed their habitation, and sorrow had now given place to happiness. The joy of youth — the season of spring — an affectionate mistress, and the margin of a stream; this is the new-wine of life — and more needs not — happy he who has this within his reach!

The happy day on which the pair arrived at that spot was the night of the middle of the month *Āzar* (*i.e.* vernal month). On every bush roses were blowing; on every branch a nightingale was plaintively warbling. The tall cypress was dancing in the garden; and the poplar never ceased clapping its hands with joy! With loud voice, from the top of every bough of the willow, the turtle-dove was proclaiming the glad advent of spring! The

diadem of the narcissus shone with such splendour, that you would have said it was the crown of the emperor of China! On this side, the north wind, on that, the west were, in token of affection, scattering dirhams at the feet of the rose. The earth was musk-scented; the air musk-laden!<sup>7</sup>

Two affectionate and loving friends find themselves at home wherever they go. The relations of the male partridge and the neighbours heard of his arrival, and hastened to visit him. One kissed his face, another brushed from his plumage the dust of the journey. Such affection did they conceive for each other, that they were never apart: all day, wandering about desert and country; all the year, roaming joyously without a care. I need not say that no cultivated fields or houses were there; that there was no night attack, or plunder, or ravaging; for not even a land-measurer passed that way; no burner of (the herb) alkali came there to give any one a headache. As the father did not wrong the son, the son sought not take his father's life. As the daughter used not violence towards her mother, brother did not deprive brother of eyesight. Happy that time, those days, that age! when none had a quarrel with his neighbour. The world being then free from the ills of strife, the eye of the arrow saw not the face of the bow.

Thus passed some years over them, during which care or grief visited them not. But triumph not, O friend, in prosperity; still look forward to the evening and the night of grief. Bid the young think of the sorrows of age; let the aged reflect on the sufferings of death. There chanced to come on such a year of drought, that it was impossible to procure a drop of water from the fountains, and a hundred ears of corn yielded not a single grain. Locusts drank from the cup of every one. Not merely the store of the poor was exhausted, but even the granary of kings was empty. People went to Egypt and to Syria to procure corn, as in the time of Joseph (on

whom be peace!). When the eye of the partridge awoke from sleep, he found himself destitute of provision. His mate said: "It matters not; let us practise devotion, and be satisfied with what little there may be. It is better to be content with barley-bread than to carry one's request before the king." The male partridge replied: "You pass your days in difficulty; yet sorrow not, for grief as well as joy will pass away. Six days' journey off is the City of the Peacock; there, perhaps, corn may be procured. I have there a friend, by name Durrāj,<sup>8</sup> from whom I can borrow something." He thus spoke, and, embracing his mate, went forth, and took the way of the mountains.

The male partridge departed; the female remained behind, and sang her sad songs. The master is the stay of the house; when he leaves it, it falls. He was absent about five months, for he loitered long upon the road. When winter came, and the cloud rained camphor from the sky, and ice closed fast the eye of the fountain, suddenly the male partridge returned from his journey, and entered to take his spouse to his bosom. He beheld her changed; her neck slender, her body swollen. When he saw her thus apparently pregnant, all his affection for her was at an end. "I see," said he, "that I have involved myself in calamity. I have left a giddy wife at home! Fine housekeeping this! A rare husband I! In my absence you were about your own affairs; — tell me from whose granary is this grain?" His mate vowed by 'Isa and by Maryam<sup>9</sup> that he suspected her wrongfully. "No one has seen my face since you left; no one has beheld a feather of me. You are my only treasure in life; you are father, relation, every tie of my soul." The enraged husband, however, gave her no credit, but tore off the head of his helpless mate. With her blood they wrote on her tomb: "Shed not innocent blood; if you wish not your own disgrace, do it not! He acts wisely who acts with reflection." The partridge repented

of what he had done, and that he had acted on mere suspicion. "Where," said he, "can I meet with a companion like her? — one who was ever contented and accordant, and who bore patiently with my reproaches!"

The birds of that quarter, hearing of his return, waited on him to congratulate him on his arrival. When they saw his wretched mate weltering in her blood, their hearts burned with compassion for her. One asked: "Why have you slain your mate? No one entered this house. I will answer for it that this poor wretch had no crime." The husband told the whole story with tears. They assured him with one voice that he had acted precipitately; that he was mistaken grievously; that in that city a disease had been raging for some time, by which the crop was swollen; but that a certain grass was a cure for it. "Why," said they, "did you not tell your case to any one?" The male bird was distracted at hearing this, and reproached himself bitterly. He lit up a fire, and burnt his house and home. He procured poison, which he took, and died. If he deprived another of life, he saved not his own!

---

<sup>1</sup>A pleasure-garden near Shīrāz, where Hāfīz is buried.

<sup>2</sup>A river of Paradise, according to Eastern poets.

<sup>3</sup>A suburb of Shīrāz, famous for its gardens and villas.

<sup>4</sup>Muslim believe that the breath of the Messiah had the virtue of restoring the dead to life. In the Persian romance of the Four Dervishes a very skilful physician is named 'Isa (Jesus) in allusion to this notion.

<sup>5</sup>Hāfīz, in one of his beautiful *gazals*, exclaims (according to Mr. S. Robinson's translation:

"Hail Shīrāz! incomparable site! O Lord, preserve it from every disaster!

"God forbid a hundred times that our Ruknābād be doomed, to which the life of Khizar hath given its brightness!

“For between Ja’frābād and Mosella cometh the north wind perfumed with amber.”

<sup>6</sup>According to the Eastern legend, Khizar was despatched by an ancient Persian king to procure him some of the Water of Life. After a tedious journey, he reached the Fountain of Immortality, and having drank of its waters, they suddenly vanished. It is believed that Khizar still lives, and occasionally appears to favoured individuals, always clothed in green, and acts as their guide in difficult adventures — hence the allusion as above. — Khizar is often confounded with Moses, Elias, and even St. George. The name Khizar signifies *green*.

<sup>7</sup>“There is, I believe,” says Dr Johnson, “scarce any poet of eminence who has not left some testimony of his fondness for the flowers, the zephyrs, and the warblers of the spring; nor has the most luxuriant imagination been able to describe the serenity and happiness of the golden age otherwise than by giving a perpetual spring as the highest reward of uncorrupted innocence.”

<sup>8</sup>Durrāj is not a proper name, but the Persian name of the francolin, a species of partridge.

<sup>9</sup>Jesus and Mary.

(Trans. by W. A. Clouston)<sup>26)</sup>

同じ傾向は『ピルパイの寓話』にも尾を引くことになり、たとえば *Les Fables de Pilpay Philosophe Indien ; ou La Conduite des Grands et des Petits*<sup>27)</sup> では、“Fable Du Pigeon voyageur” は9ページにも及んでいる。西洋的同化の過程を示す典型的な一例である。A・F・ドーニの翻案 *La Filosofia Morale* (1552) やT・ノースによる英訳 *The Morall Philosophie of Doni* (London, 1570) になると、*The Fables of Bidpai* を唱ってはいいても、もう完全な創作に近づいていると言ってよい。

さて『百諭経』に目を転じると、これは元来サンスクリット語 *Upamāśataka*（たとえ話百集）からの漢訳だったらしい。<sup>28)</sup> 撰者はサンガセーナ（Sammghasena, 増伽斯那<sup>そうぎゃしな</sup>）、漢訳者はグナヴリッディ（*Guṇavṛddhi*, ぐなびじ<sup>ぐなびじ</sup>）とされる系統のものと、撰者不明で支謙訳の系統のものが存在した（付図Ⅲ参照）のだが、後者の訳は現存しない。インド出身のサンガセーナがこの *Sūtra*（経）を弟子のグナヴリッディに教え、後者は479年に中国にやって来て、はじめは口述していただけだったのだが、492年になって自らの漢訳を記録したのだという。502（または503）年に、当時の中国（梁）の都だった建康<sup>けんけい</sup>で没した。

『百諭経』はインドの説話文学中の一ジャンルたるアヴァーダナ（*Āvādana*, 譬諭）、つまり、古代中国の仏教文学中の一つの特殊分野に属する。その特徴を翻訳面から見ると、インド文学の特徴たるアヴァーダナやジャータカ（*Jātaka*, 本生談）の形式よりも、むしろ当代中国の『搜神記』や『干寶』といった“小説”特有の形式をとっている点にあり、形式はより厳格になり、一般論は圧縮され、副次的な筋は省略されている。グナヴリッディが中国に滞在した13年間に、こういう変化が生じたのだ。<sup>29)</sup>

こうして内容・形式ともに中国文学の一つとして定着する。時代の変遷につれ、いろいろと改編されながらも、楽しい読み物として出版され続けてきた。魯迅の如きは自費で1914年に『百諭経』を刊行したほどである。<sup>30)</sup>

我国に『百諭経』が伝来したのは平安朝末期の11—12世紀ごろか、それ以前のことらしい。現に12世紀半ばごろには、その写経が存在していたのである。しかし、『百諭経』は我国の場合、『大莊嚴論経』や『賢愚経』が『今昔物語』に及ぼしたほどの、大きな影響力は持たなかった。<sup>31)</sup>

邦訳の歴史は明治30年（1897）に遡る。高山喜内氏の『百諭譚』（擁書閣, 98 p.）がそれだ。凡例に「其本義に悖らざる限りは、往々其文辭を取捨増減せり」とあり、故にあえて百諭譚と題したという。漢文の読み下しに近いスタイ



ルになっている。参考のために次に引用しよう。

## J) 二鴿の喩

昔し雄雌二羽の鴿同じ巢に住みしが。秋の果実の熟せる時。共に之を啣み來りて巢に充たしぬ。日數経るまゝ其果物乾きて。只半分が程になりけるを。雄鴿は雌鴿の食ひしものと思ひ僻め。さしも辛苦して集めしものを汝獨りにて貪り食ひ。僅か半分に減せしこそ不埒なれと詰れば。何ぞ獨りにて食ひ待らむ。果物乾きて自然と減りしなりと言解けども。雄鴿はつやつや合點せず。食はぬ果物の減るべき理由なしと腹立つままに雌鴿を啄き殺しぬ。やがて天大に雨降りて、果物を濕しければ。果物再び脹れて舊の如くになりけり。雄鴿これを見て悔み嘆き。彼實に食はざりしを。我が愚痴故に殺したりと。悲鳴を擧げて飛廻り。汝何處に去りしぞとて。空しく雌鴿を喚び慕ひけるとなん。

凡愚の人。顛倒愚惑の故に。五慾に耽りて無常を觀せず。重禁を犯して後悔ゆるとも。將た何の及ぶ所ぞ。彼の痴鴿の事以て鑑となすべきものなり。

(高山喜内訳)<sup>32)</sup>

続いて、明治39年(1906)には、河崎顯了氏の『新釋 百喩經』(法藏館, 143 p.) が現われた。袖珍本のなかに、多少、換骨脱胎した意識が試みられており、全部で74話が収められている。問題のモチーフは掉尾を飾っている。総じて宗教的色彩が濃く反映しているのが特徴だ。

## K) 二匹の鴿

昔、雌雄二匹の鴿があり、共に一つの巢の中に棲んでおつた。秋になりて果物が熟した時、二匹は精々と之を取り集め、山のように巢の中に貯へた。其後晴天續きでありた爲め巢の中の果物は、乾上りて半分程になりた。すると雄鴿は雌鴿に向ひお互に辛勞して集めた物を、お前獨りて食ふと云ふことがあるかと怒り出した。雌鴿はそんなことは決して致しませぬ、晴天の爲めに乾上りて、こんなになつたのであると辨解したるに雄鴿はなかなか承知せ

ず、お前まえが食くはな、こんなに減へるはづはないとて、遂ついに啄つつき殺ころして了しまふた。  
 他日たじつ大雨おおあめが降ふりて、果物くだものは水氣すゐけをふく含ふくんだるが爲ためめ、故もとの如ごとく巢すの中なかに盛もり上あがり  
 たれば、雄おはと鳩こは是これを觀ながめて、つまらぬことをして雌めはと鳩こを殺ころしたとて、非ひじょう常なに鳴  
 きかなし悲かなんだとのことである。

七度ななたび搜さがして人ひとを疑うたがへと申まうすこともありて、物事ものごとには篤とくと其その源げん因けつ結くわ果しらを驗しら  
 へた上うへでなければ、決けつして是ぜ非ひの判はん断だんを下くだすべきものではありませぬ。急せいては  
 事ことを仕し損そんずるものなれば、萬ばん事じにつつき、虚きょ心しん平へい氣きに幾いく度も考かんがへることが肝かん要よう  
 であります。

(河崎顯了訳)<sup>33)</sup>

昭和5年(1930)には、赤沼智善・西尾京雄両氏による和訳『百喻經解題—  
 一國譯一切經』本縁部七(大東出版社)が出版され、さらに戦後には、これに  
 依拠した棚橋一晃氏の完訳や、大衆向けを意図した古田和弘氏の抄訳〔既出の  
 C)を参照〕が現われている。しかしながら絶版のものや、入手し難いものが  
 殆んどの状態では、はたしてどれくらい、我国の読者層に浸透しているかは、は  
 なはだ疑問と言わねばなるまい。

最後に特記されるべきは、既述のロシア語訳の出現である。この訳本は、ソ  
 ヴィエトの手堅い東洋学の伝統を踏まえて、中国・日本の文献に目を通して  
 いるほか、Stanislas Julien,<sup>34)</sup> Édouard Chavannes<sup>35)</sup> といったフランスの学者の  
 研究書にも言及している。露訳は精密で信頼するに足りる出来映えだし、<sup>36)</sup> 注  
 釈も簡にして要を得ている。英文レジュメがついているのも良い。これを契機  
 にして、他の西洋語にも翻訳される暁には、筆者が本稿で指摘したような“接  
 点”は、多くの学者がすぐに気付くことであろう。

それはともかく、少なくとも800年以上の隔たりのある、西洋の作品  
*Sendebär* と、東洋の作品『百喻經』とが、明らかにインド説話文学を介して連  
 結していることを如実に示す証拠が得られたわけだ。しかもこの「鳩と巢」の  
 モチーフを除いては、この両作品に共通するモチーフがほかに見当たらないの  
 は、これまた不可思議なことである。

〔註〕

- 1) A. Loiseleur-Deslongchamps, *Essai sur les fables indiennes et leur introduction en Europe ...* (Paris, 1838).
- 2) T. Benfey, *Pantschatantra ...* (Leipzig, 1859).
- 3) 宗茅生訳『五章の物語』(平凡社, 1965), 田中於菟弥/上村勝彦訳『パンチャタントラ——五巻の書——』(大日本絵画, 1980)。
- 4) 平松友嗣訳『インドの古典民話 ヒトーパデーシャ』(理想社, 1956), 金倉圓照/北川秀則訳『ヒトーパデーシャ——処世の教え——』(岩波文庫, 1968)。
- 5) 岩本裕訳(岩波文庫, 全4冊, 1954—61)。
- 6) 田中於菟弥訳『鸚鵡七十話——インド風流譚——』(東洋文庫, 平凡社, 1963)。
- 7) 金子健二訳『英吉利中世詩 ローマ七賢物語』(健文社, 1930)。
- 8) 拙訳『女の手練手管の物語』(「桃山学院大学 人文科学研究」第18巻 第3号(1982), 第19巻 第1号(1983)所収)。
- 9) 前嶋信次/池田修訳『アラビナン・ナイト』(東洋文庫, 全20巻, 平凡社, 1966—)。
- 10) 菊池淑子訳『カリーラとディムナ——アラビアの寓話——』(東洋文庫, 平凡社, 1978)。
- 11) 拙稿「中世スペイン語版 *Sendebār* ——『女の手練手管の物語』試訳ならびに研究(下)——」(「桃山学院大学 人文科学研究」第19巻 第2号(1983), pp.47—79)。
- 12) 金子健二訳, 上掲書, “はしがき”。
- 13) S. Thompson, *Motif-Index of Folk Literature* (Bloomington, 1955—58), vol. 5, p.100.
- 14) 文學古籍刊行社, 1955, 北京; 1958<sup>2</sup>, 上海, 卷下, pp.33—34。
- 15) Translated, edited, and with an introduction by M. Epstein (Philadelphia, 1967), pp.116—20.
- 16) 入矢義高編『仏教文学集』(中国古典文学大系第60巻, 平凡社, 1975), pp.251—52。
- 17) *Tales of Sendebār, cit.*, pp.117—21.

- 18) Бай Юй Цзин (Сутра ста притч). Перевод с китайского и комментарий И.С.Гуревич (Москва, 1986).
- 19) もっとも、これはいわゆるカルカッタ第2版 (Calcutta II, 1839-42, 4 vols., ed. MacNaghten) に収められているもので、邦訳としては池田修訳 (上注9)の13巻 [1985]) と大場正史訳『千夜一夜物語』(バートン版, 河出書房新社, 1967, 4-5巻「女の手管と恨み」) とがある。
- 20) 『アラビアン・ナイト』前出, 13, p.55.
- 20') 『千夜一夜物語』(バートン版), 前出, 5, pp.21-2.
- 21) 『カリーラとディムナ——アラビアの寓話——』, 前出, pp.229-30.
- 22) *Sendebār* — *Libro de los engaños de las mujeres*. Edición preparada por José Fradejas Lebrero (Madrid, 1981), p.135; 『千夜一夜物語』(バートン版), 前出, 5, p.50.
- 23) *Libro de los Engaños*. A cura di Emilio Vuolo (Napoli, 1980), pp.44-5. 拙訳は「桃山学院大学 人文科学研究」第18巻 第3号 (1982), pp.54-83および, 同第19巻 第1号 (1983), pp.67-94に所収。
- 24) *El Libro de Calila e Digna*, Edición crítica por John E. Keller y Robert White Linker (Madrid, 1967).
- 25) *The Book of Sindibād; or, The Story of the King, his Son, the Damsel, and the Seven Vazīrs* (Privately Printed, 1884), pp.233-34.
- 26) *Ibid.*, pp.39-46.
- 27) Nouvelle Edition. Revue & Corrigée (Paris, 1702).
- 28) 棚橋一晃訳『ウパマー・シャタカ 百喩経』(誠信書房, 1969), p.209.
- 29) Л. Н. Меньшиков, “Вступительная статья”, in Бай Юй Цзин, *cit.*, pp.15, 126.
- 30) 『百喩経』, 周樹人施 (金陵, 民国三年 [1914] 秋九月)。その他の関係書には次のものが出ている。馮雪峯『百喩経故事』(上海, 1948), 鄭拾風文『百喩経新釋』(上海, 人民美術出版社, 1956), 倪海曙譯述『百喩経故事』(上海, 文化出版社, 1957)。
- 31) 棚橋一晃, 前出, pp.221-22.
- 32) 『百喩譚』, pp.89-90.

33) 『新釋 百喻經』, pp.141—43.

34) Les Avādanas (Paris, 1859).

35) *Cinq cents contes et apologues extraits du Tripitaka chinois et traduits en français* (Paris, 1910-34).

36) 参考までに、「雄鳩と雌鳩についての話」の露訳を掲げておく。

L) *О голубе и голубке*

Некогда голубь и голубка вместе свили гнездо. Осенью, когда созрели плоды, они наполнили ими гнездо. Через какое-то время плоды высохли, их стало меньше, всего полгнезда.

Голубь с гневом обратился к голубке: "Собирая плоды, мы оба усердно трудились, а ешь их ты одна, и осталось уже только полгнезда". — "Я вовсе их не ем, — ответила голубка, — просто сами плоды становятся меньше".

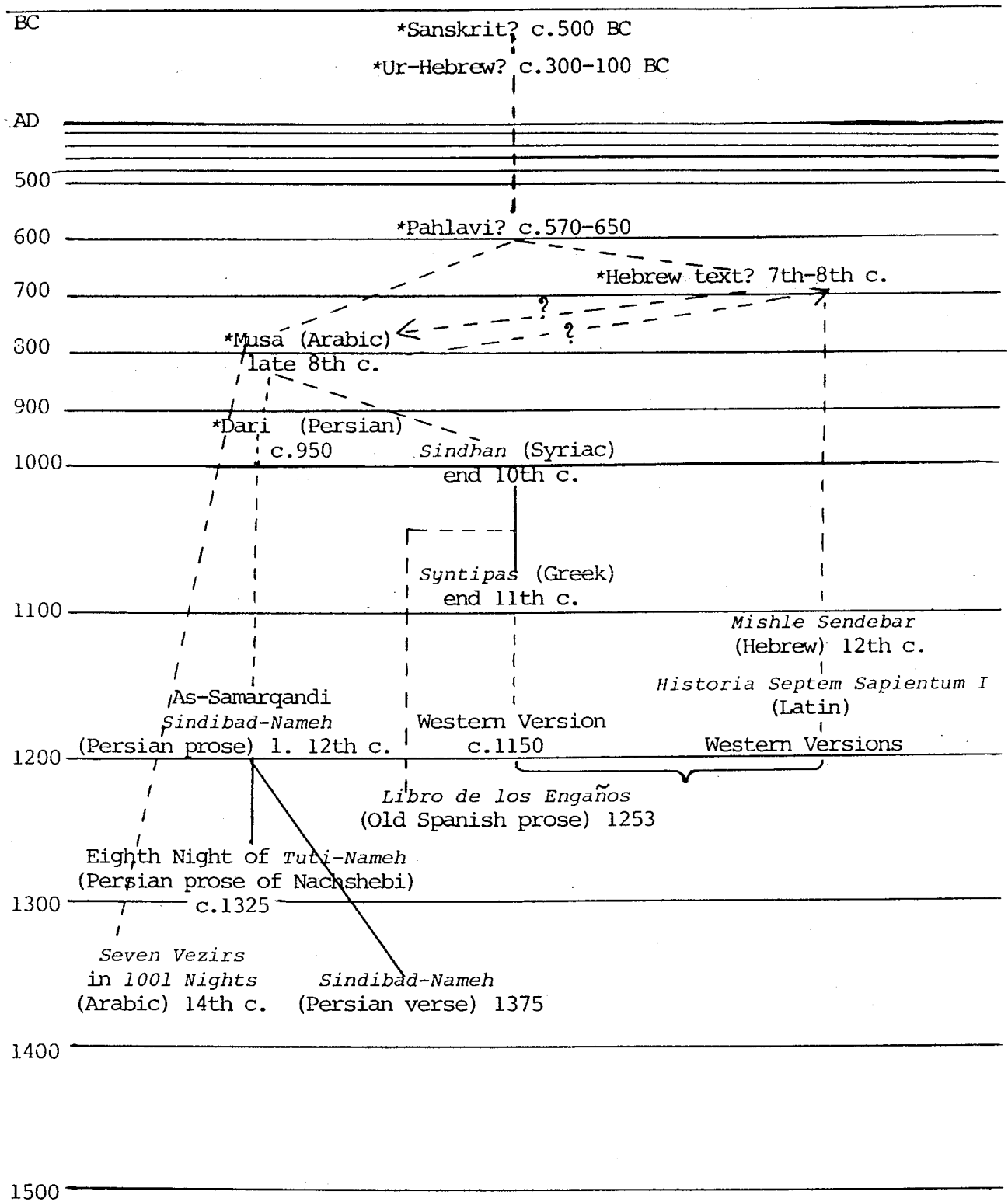
Голубь не поверил этому и сказал рассерженно: "Если бы только ты их не поедала, как бы их могло стать меньше!" И он тут же заклевал голубку.

Не прошло и нескольких дней, как пошел сильный дождь, плоды набухли, и их стало столько, сколько было поначалу. Когда голубь увидел это, у него сразу возникло чувство раскаяния: "Она действительно не ела их, а я так безрассудно убил ее". И он стал скорбно ворковать и звать голубку: "Куда же ты ушла?"

Люди, живущие в мире, поступают таким же образом. В мыслях они все ставят с ног на голову. Безрассудно принимая плотские наслаждения, они не думают, что все это непостоянно. Они преступают строгие запреты, а раскаяние приходит поздно. Упущенного не наверстать. Потом остается лишь тяжело вздыхать.

Это можно уподобить глупому голубю.

『シンディバード物語』の系譜



付図 I

(C. van Buuren, *The Buke of the Sevyne Sagis*,  
Leiden University Press, 1982, p. 186)



